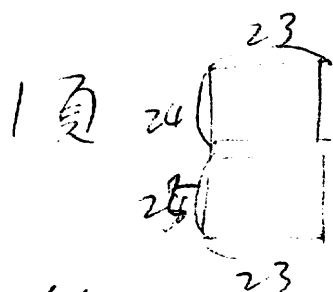


# 部 報

( 32 年度 )

III

北海道大学馬術部



552字  
 575  
 1127

## 目 次

マニヤ理科よ .....	鎌田 正人 .....	7
後若ヒ年目の課表 .....	生田 勝一 .....	4
前年回顧 .....	樋口 正明 .....	6
馬術部会計報告 .....	森本 梯次・佐伯 雄二 .....	7
昭和三十二年要戦綱 .....	千葉 幹夫 .....	10
東北・北海道馬術大会に参加して .....	中村 みゆき .....	16
いさよこの記録 = 倒首日誌から = .....	村山 哲 .....	20
マネージャーとなって .....	田中 彪介 .....	21
オ29回全日本学生馬術選手権参加の記 .....	鎌田 正人 .....	23
北大馬術部講習会の思い出 .....	高階 悠子 .....	24
暑期部内委員会によせて .....	河原 紀夫 .....	26
入部感想 = 控馬記 = .....	佐藤 典子 .....	28
新編盛足の頃 .....	高橋 陽 .....	29
入部八ヶ月の感想 .....	泉 邦男 .....	32
編集後記 .....		33

# マニヤ現れよ

鎌田 正人

「自分自身何も出来ぬせしむし大方のち小言を聞くかよ知れぬし、又茲自身もいさ、かあつかましいことは判つていませが日本馬術界の現況とそれに對して私にち馬術部のとるべき道と言ふ様な事について意見を述べてみてほしいと思ひます。

日本の馬術界が戦後の隆盛の崩壊によつて氣息奄々としている時、その存続を志し得て、更に現在の隆盛をとたらしむるは学生馬術をその胚とし、基盤とし、起ることは既に良く知られてゐるにこそです。

昭和二十六年九月に戦後一時中断されていた馬術部が復活し馬術界に仲間入りしたのが、二十九日団体開催を期として同年秋季に団体競技用に調教された馬六頭を当時の馬学長 大森部長、松本教授等の御好意と努力によつて自馬として繁殖し得たことは、一つの大きな振興となり現在の発展を招来し得たわけで、当時の大英断に對して私どもは大いに感謝せぬはならぬ。

更にオ一農場に對する全面的依存軍世の団体に比して絶對的に有利な点があることは忘れてならないことで、種々の困難はあったが今日では完全に北海道馬術界の中心を爲すに至つたことはその純粋性からしても当然のことかと知れませぬ。

戦前は軍隊に充分な馬し優秀な調教師が居り又地方にも多くの教取者が居た為、アマチュアによる馬の調教と云ふことは軍人を除いて余り乏えられなかつた、しかし戦後はこの調教師とか先生は殆んど見られなくなりわがかに東京等に小教習られるにすぎない、それ故にこれ等調教師と云われる人に付込まれる乗馬の数は極く限られ、多くの人は自らの馬を自ら調教を施して乗り易くし、更にそれと平行に自己の技術を磨くと言ふ方法を取らざるを得ない、即ち良く調教された馬から教わるに云ふ機会が殆んどなくなつたのである。

戦后より今迄全日本大会、団体等下於ては今迄ベレ小数の取扱者により良く調教された馬下騎乗して出場した選手が、尋くの種目で上位を占めてゐるのは当然であるが、近年に至つてこの東京絶対優勢のジックマは天才に類らぎ、地方勢の努力と、自ら馬を調教し、その馬で競技に出ると云う馬術本末の姿の認識が滲透して来た故ではないかと思われ、更に一つ、上記調教所の方々の批判のない独善と軍令的取事が関係して居ると思ふ。

大変失礼になるが現在の調教者達は猶々十年が乗馬の出来る限界であるとせば、近い将来、出上つた馬のみに乗つて馬を自ら調教する事を知らなかつた東京勢と地方との間には、現在とは僅の力の差倒が起るであらうと考えられるのは早計であらうか。

さて、顧みて我朝の現況はどうであるうか。自馬を得て以て未尋くの対立競技に殆んど勝ち、やはり自馬の初果曾大なりと感嘆させられた。確かに練習量が充分になつた事と、組織的な訓練の結果は、一見、堅確な騎姿、脚を養成した事が、それはシヤニ無に馬にしからず、平衝への無屯着に依つて得られ、これを馬について見れば、硬い口、鈍感な扶助に對する反応、平衡への無屯着と云ふ母ましくない結果を招き「ひつかける馬」「障礙の逃避の上手な馬」を依り上けた。

即ち尋くの優勝は馬の調教、即ち少しで乗り易い馬を作ると云ふことを考外視して、結果的には馬を悪くしなからその上と確いたと云つても過言ではない。これでは馬術部と云う名を返上した方がよい。しからは如何なる方法を取るのが良いかと言ふ事になるとハタと壁に突き當つてしまふのである。何故ならば朝員自身も馬を調教する為には相當の修練を積まねばならないし、その為には現在の頭数では全ての馬の調教を成る程多量犠牲にせねば果し得ない。又一才秀れた感覺を養成する為には良く調教された馬を必要とする。しかし一年二年の間には充分な訓練を積んでは、これ等の人々は少くとも三百ほどの鞍数を必要とする様に思われる。は三年四年では相當の調教能力を備へ得るを確信する。

しかし二年間に三百鞍と言ふのは所謂、マニヤの部類に属する様だと思われる。それでこの様な表裏を訳であるが、皆がマニヤであり、マニヤの出現をうながすやうに新入生には馬

術の深さ、広さ、そして面白さを教之ぬはならぬと願う。

さて、三年四毎となつて朝教をする様になつて一人では足りに陥り易いものであるから、  
ここに必要なる事は先づに經文の理解を取り、批判をうけ、経験と意見を聞き、且つ肉體馬術家  
の著書を熟讀して來い、常に研習心を持つて行われねばならぬ。

先輩の才々も大いに批判し、時には自らもまごころで叱咤激励し、論議し、純粹に馬術の女界  
地から後輩を指導していらしたと聞いては、

訓練に當る上級生は小さな欠点を多く見出して注意するよりは、訓練する者自身が、假く研  
究しつゝ、その人にとつて今一番欠けて居るものを何れかを良く洞察して訓練の効果を上げるべきで  
ある。

今迄申し上りた私の意見は大変悠はつたもの、殊に夏えるが、針屹競技、盛年馬競技を盛進  
するものではない。唯浅ら盛年馬競技に勝つ輩が出來て、自分達の毎日走つて居る馬が硬い  
口であるたり、扶助に反拗する馬であることが現れて居るのではないのである。

馬術の上手下手は絶對において如何に馬を調教するかと云ふことであつて自ら調教した馬が  
なければ「羽化登仙」等と云ふ馬術の真髓は百年かかなくとも得られぬ事と云う。そしてこの條  
致り意見が實現出來るとしたならば、マニマの夢いごと、研究心と芝草の断えたる指導とな  
ければならぬ試である。

大御大きな口々ささましたか、酒杯の意見を是非小せさせられ幸甚と願います。

馬術の女界

# 後活七年目の課題

生田勝一

昭和三十三年八月五日、従来八月日役領文啓期を二月繰り上ると言う樋口前主将の才針に基き、不肖私が才七期主将に就任しました。以来五月無我夢中のうちにどうやら今年後期の諸行事を大半終了した次第であります。まあその概況を御報告致します。

七月五日 総会、役員交啓

七月十日―十七日 夏期前期合宿

七月十七日 社青山学院大羊親善試合

七月廿一、廿二日 才十五回正七大学定期戦（茶仙台）

八月廿七日―九月三日 夏期後期合宿

九月七日 四年目卸負修学遠来会

九月廿二日 才二回北海道団体選手権大会（於北大）

九月廿三日 才四回北海道大会（於北大）

十月十九、廿日 東京大会出場（於パレス乗ク）

十月廿六、廿七日 全日本馬術大会出場（於馬事会）

十一月二、三日 関東学生自馬大会出場（、）

十一月八、九日 恒剣道内牧場見学（新得道五種畜場）

十一月十日 社幹会畜大秋期定期戦（於勝玄）  
十一月十七日 北海道学生馬術選手権大会（於北大）

尚今年の最後を飾って十二月十四、十五日東京大会に於て全日本学生馬術選手権が争われる予定であり、北海道を代表して我が部から鎌田玄龍が参加されますが、大いに期待出来るものと思えます。

さて何事につけてかく七年目になると問題多き年とされてはいるようですが、我が部も又どの例外ではないように思われます。別に愛馬が浮気心を出すわけではありませんが、周囲の情勢が次第に現状の維持を困難にしていきつ、あるからです。才をわち才一に老令愛馬の老朽化によるよるゆき、次に概合、馬場、初室等諸施設の老朽化――と云ってこれ等は当初から相宜いかれてはいたものと思われますが――又用具、備品等の消耗被覆、そして更に大羊会計課の冷遇化、とつとと直接損害を受けるのは才一農場畜産関係でしょうが、これに所屬している我が愛馬の采養状態に大いに影響を及ぼすのは当然であります。嗚呼なんたる動物愛護の精神に反したる仕打ちであることか。

社外的には復活以来の裾々たる結果により一応我が部の地位を確固不動のものとしめ、又樋口前主将の抱負であった恒剣道内馬術思想の普及と才一にその目標に近き

つ、ある現在、斯坎安局面を打開し前一步の発展を促せるには今一變我が部の基礎を充実せしむるよう努力する必要があるとの思われませす。すなわち、一、で部の運営の在り方に再検討を加え新しい方向に導いて行かない限り部の存続は難しいからです。

右の杯を構想のしと下に就任直後次の如く新役員を決定致しました。

主将	生田 勝一	経 三	旭川東高卒
副将	千葉 幹夫	秩 三	一関一高卒
マネージャー	田中 総介	豊林 三	清水東高卒
補	高橋 陽	教養 一	室岡東高卒
渉外	門余 駿	医進 三	横須賀高卒
飼育	村山 哲	経 三	札幌南高卒
補	佐伯 雄二	豊富 二	大森高卒
・	本橋 幹久	豊富 二	鳥取東高卒
会計	森本 博次	豊富 二	旭坂高卒
補	吉田 三	教養 一	大泉高卒
煮湯編成	長谷川 明	法 二	札幌北高卒
補	大場 善昭	教養 一	札幌北高卒
記録	栗 朋男	教養 一	兵庫高卒
女子部長	岸山 節子	文 二	札幌南高卒
技術顧問	飯田 正人	教 三	

右の役員編成に当り留意した点は部内のチームワークを確実なものとし、部員各自が自覚と責任を持ち、又少教の訂算に責任分担が際重とならぬ状態をより役員教を増したことで、更に役員交替期を早める為には毎年度の部員に早く部の運営状態を掴ませるよう考慮した点です。

七月目の課題には二つばかりに馬術部後援会の結成と云う大きな問題が残されています。これは前主将の手掛けられた問題でオカ昭和世三年のシーマン開始には本人と本結成されるように各方面に救助の働きかけを心算致しておりますのでこの旨が次第に絶たなる御援助をお願いする次第であります。

最後に来年度の主な行事予定を御紹介致します。

三月下旬	春期台酒
四月上旬	全国学生指導者講習会参加(東京)
四月中旬	第二回管内馬術講習会主催
五月上旬	春期台酒、牧場見学、部内競技会
五月中旬	対峙玄富産大予定期戦、インカレ杯争奪戦(幹玄)
五月下旬	招待東日本馬術大会(東京)
六月中旬	東北北海道大会(岩手) 対東北大学定期戦(仙台)
七月中旬	国立七大学定期戦(東京) 夏期台酒、北海道大会
七月下旬	招待全日本女子学生馬術大会主催
七月下旬	札幌地区連善リ大会
八月下旬	夏期台酒
九月上旬	北海道団体選手権大会
十月上旬	対峙玄富大秋期定期戦、北海道学生選手権大会
十月中旬	恒民体育大会、全日本馬術大会

# 前年回顧

樋口 正明

競走生の御尽力によつて長年の希望たる白馬を得て三年余、以来決意の先輩の努力によつてこの白馬による効果は貸与馬競争と自馬競争とを同物とに思われ、中央馬術界に於ける北大の地位は毎年に相当向上しつゝあると思われ、しかし一歩視野を拡大すると現在の日本馬術界のすべてに共通する問題としてあるが、北大馬術部の存在は益々、影が濃いと想う。

この空前年度の最初目標とした北海道四府に札幌市内更に北大内部の馬術普及、愛好者の増加等に ついてはあまり効果を上げることが出来ず、対外試合の日程に迫られて一般に對するPR活動が不足したことを反省している。今春才一回年内乗馬講習会は盛況であつたが年内馬術大会が流れてしまひ又別年 初年度大に行われていた北海道大会を秋に延期し小規模に終らせてしまつたことは原因がいろいろあつたとしても責任を感ずる。又馬術の普及愛好者の増加の點から大いに期待した女子と高校生については 北大の女子部員も対外試合に初参加する実力になり今後の活躍が約束されるが、一方高校は以前より馬術同好会の存在した札幌北校以外の学校に馬術部を創設せんとする働きかけが成功せず、又この北校に 対しても練習の指導と云ふことが打合せのみに終つてしまつたことは失敗であつた。今後の有能な指導 諸君によつて以上の諸問題が解決されて行くことを期待している。

前年度対外試合に好成绩を得ることが出来たことは前日囃ち自活になつて居る年内の諸先生及び諸先輩又会長はじめ乗馬クラブ関係の方々の並々な御援助のたまひのであると思ふ。同時に御覧一回よく結束して各種の試合に参加することが出来たことは参加選手の多くは全く御願全員の努力の成果だと思ふ。今後尙与馬競争のみならず団体、全日本、或は来年より新に催されると思はれる全日本学生自馬大会等の各種自馬大会に於ける北大の活躍がますます期待されるが自馬の完全な調査を目標と同時 に自馬が老朽化したつゝある現在新馬購入という課題が新年變に起つて来るに違ふ。



# 馬術部 會計報告

3の外

昭和32年度決算 (自31年9月至32年7月)

〔一般会計〕

収入の部	支出の部
頭等・入部会 78400.-	庶務 14305.-
立寄金返済 4195.-	飼育 12110.-
取手差繰越 7709.-	備品 24005.-
計 90304.-	親歴 31915.-
	治療 1862.-
	補助 9779.-
	立替 7670.-
差引残額 -32742.-	特別会計 10000.-
	試合加盟 11400.-
	計 123046.-

〔特別会計〕

収入の部	支出の部
講習会 8600.-	講習会 { 500.-
謝礼 17750.-	13500.-
体育会 16510.-	東日本遠征 27925.-
席大取残額 34814.-	市大取残額 15350.-
タンス 13800.-	計 58775.-
同好会 5930.-	
後援会 12000.-	差引残額 54120.-
その他 13441.-	
計 112895.-	

〔総計〕

収入の部	支出の部
一般会計 90304.-	一般会計 123046.-
特別会計 112895.-	特別会計 58775.-
計 203199.-	計 181821.-

差引残額 203199.-	部の残額 21378.-
181821.-	
21378.-	

会計報告となるといつと数字の羅列となるのは残念であるが、これと会計と云うもの、性質上致し方ないと思う。三十二年度決算報告を前年度会計佐伯、三十二年度予算を本年度会計森本が分担して、に御報告

部員に還元される性質を保持している。これは馬術部特有の作業後の慰労費、総会に於ける菓子台席や祝賀会の補助等での依に一般会計の金は主に全

この会計面の説明をすると、一般会計は収入源を部員とけから求めたものが即ち部費、入部会、前年差繰越金及び立寄返済金であり、支出は庶務、飼育、備品、親歴

致します。

昭和三十三年度

遠征関係予算

1) 10日 計幹玄畜大定期戦(特玄) 12名  
 汽車 560 × 12 = 6720  
 弁当 個人負担

2) 5日 同上

3) 6日 東日本学生馬術選手権大会 (東京) 8名  
 汽車 1630.-  
 急行 1380.- (往復)  
 宿泊 200.-  
 食費 500.- 2910  
 文函費 200.- × 8  
3910.- 23280  
 個人負担 1000.-  
2910.-

4) 6日 東北北海道学生馬術大会(盛岡) 8名  
 計東北大定期戦(仙台)  
 汽車 1180.-  
 急行 920.-  
 宿泊 1200.- 2700  
 食費 400.- × 8  
 文函費 200.- 21600  
3900.-  
 個人負担 1200.-  
2700.-

5) 7日 帝大戦(東京) 8名  
 汽車 1630.-  
 急行 1380.-  
 宿泊 200.-  
 食費 500.- 2910  
 文函費 200.- × 8  
3910.- 23280  
 個人負担 1000.-  
2910.-

又、飼料等の飼育関係費は若人と農場から聖物支給されているが、本年六月頃から急に農場に燕麦がなくなり一日一頭につき燕麦一斗五合と云う様な事になつたが、その代りを生え始めに青草をとって償うため、飼養一同が協力してなるとかお米を切り抜けることができた。尚、燕麦備品関係は、ほぼ例年通りであった。

次に特別会計について述べると、体育会及び同好会の予算、後援会からの援助を除いての収入は、飼養の労働奉仕から得られるものである。即ち前年度初めて試みられたオ一回学内講習会、ダンスパーティー、馬を用いてのアルバイト等である。又、前年度の特別収入として見逃すことの出来なものの、一昨年度北大で開催した帝大戦の寄附残金である。即ち、乾芝草の大なる採りにより翌年の寄附金が集りその残金が前年度会計に約二万五千円繰入れられ、この為特別会計が円滑に行つた。支出は例年四月に行われる学生馬術講習会へ、即ち三名の派遣費、及び、東日本学生馬術選手権と帝大戦の遠征費であった。

次に昭和三十三年度予算概算表及び遠征関係予算表を掲げる。

# 昭和33年算概算

	部費	新育	備后	煮務	視聴	試合 (加盟)	特別	合計
9	12000	200	2000	500	2000	3000	1000	8700
10	5000	200	2000	500	2000	0	1000	5700
11	4000	200	2000	4000	1000	0	1000	8200
12	4000	200	2000	500	2000	0	4000	8700
1	8000	200	2000	1000	2000	0	1000	6200
2	4000	200	2000	500	4000	0	1000	7700
3	7000	200	2000	500	1000	0	1000	4700
4	8000	200	2000	1000	1000	1500	1000	6700
5	13000	200	2000	500	1500	2000	1000	7200
6	8000	200	2000	500	1500	1000	1000	6200
7	4000	200	2000	1500	2000	1500	1000	8200
8	5000	200	2000	500	1500	0	1000	5200
計	85000	2400	24000	11500	21500	9000	15000	83400
%		2.8%	28.8%	13.8%	25.8%	10.4%	18.0%	100%

3  
の  
中

二二を考へなければならぬことは、表をみればわかるように、遠征予算はこれが最低の線であり、何人負担額が少くないと云うことである。遠征に於ては、二、に身付たものの以外に、支出が勝手にかゝつてくるのである。又、收入の面についてこれらば予想される收入であり、不特定収入が全体の大部分を占めて

いることは、この予算の不特定性を示すものである。二のことについては田中マネージマーも書いておられるが、今語壇にのぼつてゐる後援会の確立が強く望まれるのであり、このように、医手諸兄姉が専心して試合に専念できるといふことである。

# 昭和廿二年度戦績

千葉幹夫



六月五日

才十回招待会畜産大学春期定期戦 於北大

シニア戦

北大

36.5

差 三三

北大優勝

畜大

38.5

ジュニア戦

北大

38.5

差 54

北大優勝

畜大

32.5

出場選手

シニア

樋口、渡辺、生田、今田、村山、長本

ジュニア

村山、今田、土井、森本、佐伯、田中

創年の如く対試合の幕は招待会畜産大学戦で開かれた。シニアが意外の持戦を演じたとは云之結構を飾って好調のオベリ出しを見せた。

六月八、九日

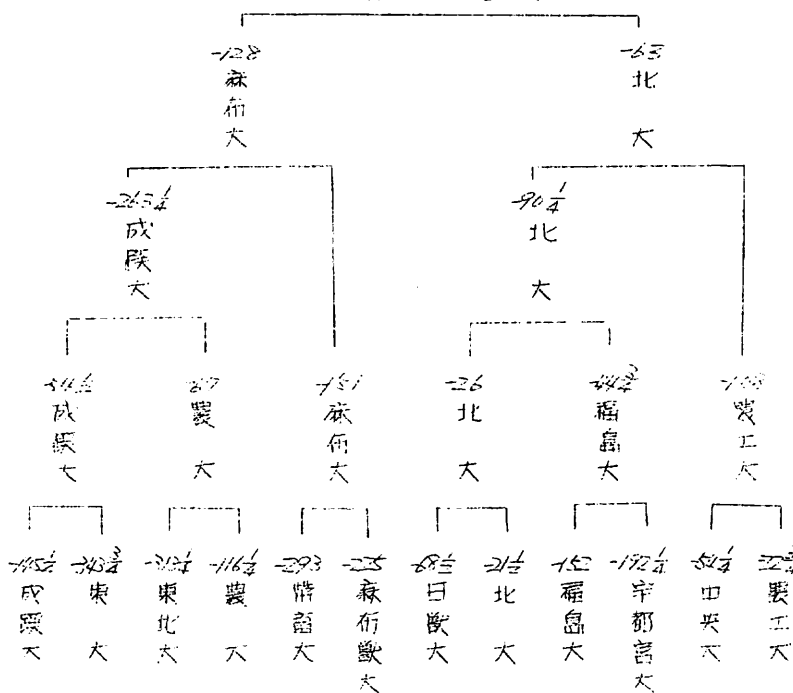
才四回招待会日不学生馬術争覇戦 於農工大

出場選手 樋口、生田、銀田、千葉、村山、今田、森

本、佐伯

毎年行われる農工大卒終の一行争としての本大会には我部は三度目の参加。先輩の先込みが効を奏したのか、北大強しの声に乗って篠の初獲を齎めかして乗込ん

優勝 北大



才一戦の相手は日大。三節校ながら田舎出とみてか初からなめてかかって来たので一回くやしませられ二れを最少得点レコードで踏破した。この勢で才三三戦はとう息をつく洞もあたまを勝進及びよく決勝

戦は昨年を優勝の麻布大と真向から対した。

相手と慎重なら此才一石のタイムマークで対したので記録的には苦しい試合とは云えなかつた。かくて、

農工学長杯、市市長杯、朝日杯を獲得して東京勢に一

泡ふかせることができた。

六月十一日

名前大名大北大三校親善リーグ戦

才一試合 名前大 北大 5/

才二試合 北大 36 名大 30

才三試合 名大 24 名前大 23

東日本大会遠征の折名古屋まで足をのびして三校親善

試合を行ったが、三番三すくみとなり決勝は行わず後日

を期して別れた。

六月十二日

対東大オープン戦

東大 9-3 北大 10 東大勝

名古屋から夜行でとって区し東大との親善試合を行っ

た。雨の為選コンションながら程変を下げて進行した

が見事東大を善味ナ結果となつた。

六月廿九、卅日

東北北海道地区大学馬術大会 於北大

出場選手 樋口、浅田、鐵田、生田、千葉、村山、今田

出場選手

樋口、浅田、鐵田、生田、千葉、村山、今田

出場選手

樋口、浅田、鐵田、生田、千葉、村山、今田

参加校 五校リーグ戦

校名	畜大	東北大	福島大	岩手大	北大	勝点
畜大	/	○	○	○	×	3
東北大	×	/	×	×	×	0
福島大	×	○	/	×	×	1
岩手大	×	○	○	/	×	2
北大	○	○	○	○	/	4
駒京	/	△	△	△	○	

優勝 北大 4勝0敗  
 2位 畜大 3勝1敗  
 3位 岩手大 2勝2敗

極くスムーズに予定通り決定、うまく行った。  
 大田世日

対東北大定期戦(才二回)

東北大 ~~282~~  
 北大 753  $\frac{1}{2}$   
 差 114  $\frac{1}{2}$   
 北大勝

才二回にして二年連続優勝即ち未だ負けど争がないといふ所。  
 七月十四日

札幌地区馬術親善大会 於北大

一位 同好会 48

二位 札幌乗馬クラス 240  $\frac{1}{2}$

三位 北大馬術部 309

四位 自任隊乗馬部 326

どういふ理由なのかわけ却は親善試合に弱い。特に同好会は鬼門だ。とにかく取りに弱しが多過ぎる。本当に強いららんとない試合でも勝つ言女人はがー。  
 七月十八日

対畜山学院大馬術部親善試合 於北大

ジュニア戦

北大 24  
 青学 53  
 差 29  
 北大勝

シニア戦

	北大	東大	名大	京大	駒大	勝点
北大		0	0	0	0	4
東大	x		x	0	x	1
名大	x	0		0	0	3
京大	x	x	x		x	0
駒大	x	0	x	0		2
勝点	0	3	1	4	2	

優勝 北大  
 2位 名大  
 3位 東大  
 4位 京大  
 5位 駒大

敗者  
 0勝4敗  
 1勝3敗  
 2勝2敗  
 3勝1敗  
 4勝0敗

出場選手：生田、樋口、鎌田、千葉、村山、今田

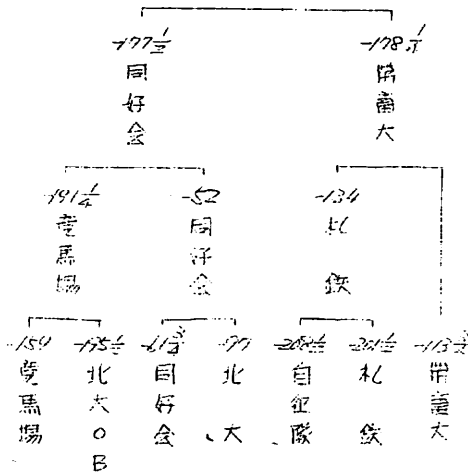
釧路での台酒へ行く途中との争だが帰りは少し位置  
 くなったかしらん。青学女子馬術部と手あわせして  
 たいと人だ。とに角男子部は相手に交らん。  
 七月廿二、三日  
 オ十五回回立七大学馬術定期戦 本東北大  
 併望の東久彌宮賜杯三連覇を目指して旧七帝大戦は  
 駒の仙台で開幕された。自他共に優勝候補を許しその  
 意気正に天をつくゆかり、さえざる者を蹴散して酒望  
 の三連覇はかくて実現になったのである。

北大 72.4  
 青学 76.6  
 差 22.4  
 北大勝

九月廿二日

オ二回北海道団体選手権大会 本北大

優勝 同好会



オ一回戦にして鬼門同好会と新戦の要さ固に形うと感  
 いつの日にか必ホニのジラクスは変われぬけれど  
 どの日の一日も早き事を祈る。

東京馬術大会 於パレス

(北海道関係今の取扱すい)

中障り飛越競技

予選失格 北領馬

特殊障り飛越競技

六位 北領馬

生田勝一

鎌田正人

大塚障壁越ぎ技

三位 北谷号 樋口 正明

北谷号以外の不振は左にじゆん致不充分の一語につ  
きる。目新しい。はでな障壁を初めて見ては馬に二三  
か人同様にまで入り込みみさうであった。じゆん致が大切  
と悪いにまされた一幕であった。

十月廿六、七日

第十回全日本馬術大会 荻馬爭公苑

(北海道関係分の取扱すい)

乙種馬場馬術競技

三位 洋考号 鎌田 正人

中障壁越ぎ技 (B)

八位 北檢号 千葉 幹夫

大塚障壁越ぎ技

二位 北谷号 樋口 正明

不詳 北檢号 生田 勝一

中障壁越ぎ技 (A)

五位 北檢号 生田 勝一

八位 北斗号 阪本 光

不詳 北谷号 高橋留次郎(荻馬場)

総合馬術競技

五位 洋考号 鎌田 正人

八位 北斗号 阪本 光

七位 北檢号 千葉 幹夫

十一日二、三日

第八回関東学生自馬競技大会 荻馬爭公苑

種目は総合馬術競技のみ

八位 北檢号 千葉 幹夫

七位 北斗号 鎌田 正人

团体 二位 北斗号 鎌田 正人

北谷号 樋口 正明

北檢号 千葉 幹夫

全日本関東大会共に自馬で参加した。自馬競技は正に  
馬術本来の目的にか変わったのであると思われるのでこ  
の種大会には機会ある毎に参加する事が必要であると認  
める。

前繋養の馬は決して他にひけをとるとのとは思われな  
い。特に北檢・北檢号は調教次第により今後の進歩には  
期すべきところがある。

関東大会の団体戦では褒死に名を成さしめしが、褒死  
怒る、にたらぶと一歩の前進で栄冠を獲得出来得るこ  
とは明らかである。出発が早く、競技用馬場にじゆん致  
出来た事等が全項上位入賞の直接原因となつて争はる  
めない。

十一月十日

第三回関東東北女子学生馬術大会



参加選手 中村・笠山

我部では対外試合に女子の出場は初めてであつたので今後の進出を考慮して女子選手二名の遠征が試みられた。結果は決して満足すべきものであつたと思はれないが我女子部の奮起を促し得た事を考へれば可とせざるを得ない。これを基礎として来年度の計画に全日本女子学生招待馬術大会を加へる事が出来た事は大いに意義のある事であり成長途上の我女子部の健やかなる発展の爲に貢献するところ大なりと確信するものである。

十一月十日

対勝を畜大秋期定期戦 於畜大

シニア戦

北大

差 北大勝

畜大

ジュニア戦

北大

差 畜大勝

畜大

出場選手

シニア

生田、千葉、村山、今田、森本

佐伯

ジュニア

森本、佐伯、田中、川奈、長谷川

本稿

シーズン最後の試合は例によつて対畜大戦である。毎年必すあつたのに今年のみで済ませるかと思つたのについに最後の試合ジュニア戦に至路遠反があつた。最後に畜大に花を持たせてやつたとは何とち情け無い事でありますよ。

これで今年進行事の大概をふり返つて見たのだが大きな試合は緊張するせいにか美力相応の戦振りを見せたのに意外の伏兵にしてやられる事が衰かつたのは反省の余地大いにあるしなけれはなるまい。他校よりめぐまれた環境にある我等は絶対的強さを誇り得る地位に立つ事が比較的容易に出来るのではないだろうか。来年度も全日本王座決定戦が行われるに違いない。その時こそ北大馬術部の真価を發揮し得る時、この冬を無為に過す事のない我諸君、一乃奮励努力すべき時ではないか。

先輩諸氏の御後援を謝し躍進を誓つて筆をとゞめる。

x x x x x x x

# 東北・北海道馬術大会に参加して

中村 みゆき

ンかの城壁らしいものや、打木を約90cm程の高さに積みそれを縦に割った形のもの、その他門扉、三段、単一、等が赤や白で塗られて配置されてあった。

昭和三年七月二日、それは忘れもせぬ仙台に於いて催された東北北海道馬術大会の日である。この日下町する私の記憶のフィルムは一瞬一瞬鮮かに美しい天然色映画の如く頭の中に今でも映るのである。私も東北北海道選手一行は鎌田監督の指揮の下に各自の馬装と凛々しく調べて賑かに着て出た。この時特に小野氏の直径3cmとあると思われる拍車のきらきらした歯の輝きは誠に見事であった。当日の天候は連日の雨続きの延長とあってどんよりとした雨雲が低く垂れ下り、おりに決して私達の心を浮立させるものではなく、むしろ、不気味な気持を察するに充分であった。殊に私は蚤く蚤く思えたのである。

約一時間ほどバスにがたごと揺られや々と町はまれにある東北大学畜産分校の馬場に着いた。この会場はるや実に傑作であった。と云うのは連日の雨の為、せつかくの立派な馬場は使用出来ぬので止むを得ずスタンドの一端の草葉に繩を張りめぐらした即製の馬場であったからである。障礙物は多く思ひ目を場内に転ぶると眩目出来上ったばかりのペンキの色も新しい赤い

「これじや着るな」と横の方で云いながら単を踏みつけて試している人と居れば、「編か、ニリや直ぐ切れるべし」と何弁かで話合っている高校生など乗って来た人々のそれらの話声を耳にしながら私は手渡されたポタラムを捲って見た。十時より開会式、直ちに自馬中障礙越競技一般の部、次いで高枝、女子となって居り午後一時から私たちの技術を發揮すべき貸与馬中障礙女子、次が高枝、そして一般の順序である。障害の高さは女子のは最低が80cm中70cmのものを始め最高は140cmで、その数は計十二回と記されてある。急いでとつとつと気がつか、る馬を見た。それらは四野、ホー、アラカヒ、杜永、秀峯、パーク、ホーゴ、足柄等の名前だけが載っているだけであり、各自その馬の性情とか癖とかは解らない。そこで私は憂胸をなえて午前中の自馬競技をじっくり見する事にした。

さて仙台時間（予定より約一時間遅れるのが席）で開会式が行われ敬詞な気持で各道界の選手（宮城、福島、岩手、青森、北海道）約六十名にまじり私も又整列した。優勝杯返還、会長挨拶、総務委員長挨拶などの後で審判

委員長（川口宏一氏）の諸注意が述べられた。彼はお  
たか西郡劇に登場する林女ニユアンスの持主で白色  
の上衣にクリーム色の乗馬ズボン。その上カウボイの  
被る林女帽子。日本人は女性のした容貌の悪い顔。そ  
してこれらから来る憧れとはほど遠い細い声。私はオ  
リンピック出場選手ともなればかくも国際色水である  
のかなとつまらぬ事を考へながら同会式の雰囲気  
ひたつていたのであった。

ポロタラムは次々と進んで来た。いよいよ午前の部  
最後の自馬女子が始った。この頃になると近くに居た  
渡辺さんが一枚の紙を手渡し女から念の高騰告の至路  
を書いてごらんと細かな所に注意を払って下さる。こ  
うなると私も真剣にやらざるを得ない。誤ってとんだ  
所を飛越しては北送直の面目にかゝわる問題である。  
エンはンでスタートから腹に至路を辿っている時であ  
った。オリンキリンと三挺止矢槍を繋がる鐘の音、そ  
れは岡野多に騎乗の番島の人である。この林女馬に当  
つたら怒馬するかとも知れないとたの中で自分の脊を空  
想したりしてゐた。そこへ今更け別の女子選手、どす  
人と人間だけが障礙を飛越しているのではないか。私は  
せめて怒馬だけは絶汗にすまいと決した。どうすると  
一さう間がどきどきしてくる。どの馬に当るかしたら  
北送で胸が一振である。

そんな気持を抱いておけると、才田番目秀峯多に野  
乗の富田さん入場。しかし途中で至路が解らなくなり  
ではその妻毎に又はどれ？その次は……と場内整理の男  
子に尋ねながら飛んでいるのである。その一応彼女はコ  
ールインをした。離分ちつとり構えた人といふものであ  
る。「あの調子で飛ぶのも一つの手法も知れない。それ  
にしてと落着きすぎを人だ」と皆で羨を覗合せて慰む  
突つてしまった。そしてともかく他の女子選手の飛越  
技をみて互に大差のない事認識し居ればいくらか気が  
楽になった。

ポロタラムが一枚めくられた。おかしな音で、私  
の巻である。マローカーによつてマサア馬中障越  
竟技の開始が報せられた。午後ともなると雲の切れ目か  
ら太陽が空を覗し始め、冷たい風が吹いてくる。私  
の顔を遠慮なく照りつけてくる。側の松尾さんは昼食のとき  
に飲んできたランニングが効いてかどうかは知らないが、  
非常に蒸着いている様子。私も飲むとよかつたアト不  
容な心を抱きつ、白手袋を濡したりマホンの皮の部分を  
水で湿したり、とこもじつとしてはいられなかつた。念  
ずる事唯一つ、照準にゴールに突つて来る事これのみ  
がこの時の私の頭を大きく支配していた。女子部に使用  
の馬は秀峯と丹野の二頭であり、私が秀峯、松尾さんが  
丹野に騎乗するのである。一瞬の丹野多スタート。と、

まもなく三停止失格・次、二番の秀峯等に騎乗の四野  
編さんである。マタート・一ツ・ニツ・三ツ箇確に運  
転した。この匹からはスヒーカーから流れる声も私に  
は半分しか耳に入らない。とにかく自分の乗る秀峯の  
方に全神を集中してゐるのであつた。棒代用の繩に  
手をかけて、私の目の前に置かれてゐる最後の障礙の  
三段に向つて突進して来た馬を見ていた。これと比べ  
ば彼女は高直であるからである。するとその瞬間、男  
よく馬は左方に切れ危うく出口の直前でストップする。ど  
やっぎはやに横から同じ福島県の人たちであつた盛ん  
に「……拍車、ほらもう一ッ拍車、レレ叫んでゐる。  
左がしかし依然として馬は怪けな横目であらぬ方を睨  
み、カンとして動かない。こつなつたら完全なる硬直  
である。後で千葉さんと思ひき声か「やあ、硬直く」  
と遊らなく可笑さうに云つてゐる。次にこの馬に騎乗  
する者は他ならぬこの私自身である。私は思わぬ繩を  
ぎつしりとにぎつてしまつた。すると耳と目で監督の  
鎌田さんがこの様な場合は拍車をゆる／＼と小刻みに  
入れ、手綱をゆるしてあげる様にと注意して下さつた。  
ちんかど全神を全筋肉にその言葉を染み込ませるま  
うに大きく一ツ二ツと、私は馬から目を離さずに鏡  
を見た。あつ、眩にタイム失格である。悪い事とは思  
いながら満点の人の末だいない事を内心喜んだ。鏡い

て才三番目、松尾さんの入場である。鞭を左手に丹野  
に乗つた彼女の落着いた容姿をちよつと見て、安心した気  
持で私はしち／＼笑つて来た秀峯の手綱をにぎり握る長  
さ、腹帯の状を吟味した。一際高い鞍の上でぐるぐる  
会場を見渡し、繩を張つた馬場、正面のデント、もし  
て十数人の障礙物の色が目に入らぬ。衝受けをし、前直、後  
直を数回繰返してゐる時はどう胸などどさくし左かっ  
た。ヒッ感じは事は練習とは違ふのだと云う事、本番は  
唯一隻のみ、やり直しは決して許されない事であつた。  
遠く北海道より唯二の一鞍のため、仙台に来たのである。  
しかもわすか一、二分の為に、旅行した時分に比費する  
ならはそれは一瞬間的なものなのだ。  
だが次の瞬間、私はマイクの声どカネの声に突い寄せ  
られた林に整列歩で入場してゐる自分に気づいた。マタ  
ートからは踵歩でゆつくりオ一の直線である筈に真すぐ  
に歩つた。芝もよし。次オ二の障礙。これは左側に  
進められる恐れがある。それを防ぐために大きめにカー  
ブして少々右斜めに馬を向けた。厭べた、オ三は高さ  
の平行棒である。通過。オ四番目は6mのレン  
かの城壁、続いてオ五番目は剛の棒のような五人しりし  
た赤い障礙。あ、無事通過、オ七、オ八共に無事通過。  
残されたオ九の障礙に向い真すぐ持つてゆきさすれば

良いのだと考へながら障礙の約二米前から拍車を緩く入れかけたときであった。デントの中から大きな叫び声。明らかに庄田さんの声援である。とたんに馬の耳がびくびくと一つ動く、私の胸とどきんとしたようであった。しかし嬉しい事にはこの障礙も無争通過だ。スピードのある散歩で馬と私はいよく最後の障礙である三條に向う。はっ、先程と同じ左側に切られそうだと感じ右手綱にぐっと力を入れてひいた。正にその時である。千葉さんであるうか「わー」とか「ウオー」とか勇ましい声、そして次の驛馬は勢いよく前肢を上げて整くこの三條を飛越してくれていたのである。ああオオオオ全御座へたと思ひながら私はゴールに突入したのであった。鞍から下りてはっとした。湿った白手袋でおさえた所頃はかたまり暑かった。

それから後の女子選手の或る人は径路違反で失格したり或は三區止で失格であつたり、してまもなく女子の部は終了したのである。従つてその結果を推察するとどうも北海道が勝つたらしい即ち丹野までは松尾さんが最高点、秀峯号では私となつたらしい。

皆な「優勝権を」とか「おめでとー」と云われたい水、この思いもよらない事のやりゆきに私はすっかり面くらつてしまつた。馬の背に乗つてとことこ走るとはけしかまのない私が優勝出来ると思つた事が一度で

とあつたらうか。甚だ意外な事なので驚び愛勝カンズを手にするまではとて急ぐ事が出なかつた事は当然である。でも高校の部、一般の部が終了し、所会式において女子中層部飛越、優勝北海道と告げられた時は実に嬉しかつた。田本と何人々に交尾さんとさうして賞状を受け取り、更にカツラの重さを手に感じた時は、思いがけない感激に私の気持は最高潮に達してゐた。

馬術は普段でその時の自分の身体の調子や馬によつて心持よく乗れる時と何となく急に高に敏感を持つ時がある。まして試合では馬場や馬厩が相当強くその敏感を支配するのである。従つて例之實力を充分に貯えていゝ人でも或時はそれを充分に發揮出来なかつたりする場合とあり得ようし又その反対の場合とあり得よう。この短時間一つの物事の結果が生ずる馬術の微妙な味とそれ特有のスリルを、に経験するにとり出されたので私は一重の喜びを味わつた。

北海道は一般の部と優勝したので驛馬としてのピル一カーヌをか、え、優勝カンスの聖さと忘れ私をちび業しい思い出を疑問したその空気を後にして、たくれせまる仙石の街路をレゼスシヨンの会場へと足を急がせたのであつた。

# いままでの記録

飼育日誌から

村山 哲



長い冬が再び訪れました。我々の愛馬達も、そう相  
当の高令ですが、相変らず元気で活躍しています。飼  
育の才もまさ無事で、馬達と暖い冬を送れる事でしょう。

七日に飼育のバトンを受け継いだわけですが、緩慢  
か変遷のごとく、青草には争刃かないし燕長も大分  
ある様だし、生れ乍らの怠慢児、儂然としている中  
に燕長がヘンチになつてヒリして色々失敗しました。  
今の飼育を顧みて、改善すべき点や、来年度の飼育に  
何か参考になるかと知れないと思われる点等を飼育に  
況の報告を兼ねて記してみようと書いています。

まず今年の事故について見ると、北嶺七、北斗五、  
北嶺四、北嶺三、北嶺三、北嶺二、朝清一が騎乗停止  
になった回数で、その大小の両きは騎乗回数に依るこ  
のようです。その事故の原因を調べると、手入  
れの不充分さと、当番の不注意によると思われるもの  
が八件、練習中他の馬に蹴られたものが五件あり、事

故の大半は人間の不注意によるものであると云えます。  
更にその事故の発生時期について見ると、一日では午  
後が多く、季節では秋気の厳しい一月二月三月は騎乗回  
数が少い為か、殆んど馬が疝疔をひいています。騎乗  
回数の少くなるシーズン始めの四月は一年中で一番事故  
が多く、その殆んどが外傷です。青草をやり始めること  
が原因となるのは、五月になると胃腸障害も起っています。  
シーズンと思われる六月から十月の間は反って事故は少  
く、騎乗停止となったのは、一ヶ月平均一、二件であり、  
シーズンの終りになる十一月に入って外傷が三件ありま  
す。十二月になってからはまだ事故はありません。

以上の事実から、シーズンの始めと終り、青草を沢山  
やり始める頃に比較的多く事故が起ると言うことが、一  
応結論されます。

次に飼料について見ると、六月、七日に燕長と愛ワラ  
がヘンチになりました。燕長の牧養は八月ですから、ど  
の前の二ヶ月をよませる様に、燕長の不足分を青草で補  
うとか、農場と連絡して飼料計画は綿密に立てる事が必  
要です。今年は七月下旬には燕長が全然なくなり、同好  
会や農場の方々に大変御迷惑をかけてしまいました。廣  
ワラは丁度夏期合宿中のことで、人手も乏しかったので、  
皆でロマンチックなヨシ刈りをやり愛ワラを鬼陸して使  
いましては、ワラに較べるとすぐ駄目になり相当量を刈

らねばなりませんでした。近頃は良いと云うので、工半部の夏のヨシを刈っていたら、実験用の動物が居なくなるという理半部から物言が入ったので、ボスラ並木の北の、怪引に絶好な場所を刈り取してしまいました。水、アベツクは大いになつかりした事でしょう。観賞用のアベツクが居なくなると、どこからか物言がつかさうでした。

セントコーンは九月から刈り始めました。十一月に雪がどんと降り、トゥモロコシは雪の中に姿を消し、雪がとけてから集めたために、衣裳と大変だったし、馬と美味しくなさそうでした。青草はまだあるし、セントコーンもあると想って居たのがさうく、の失敗で、十月の終りか十月上旬まで背味の残って居るトゥモロコシを刈って集めておくべきでした。

圃場の兼観と、農場との連絡の不十分が失敗の原因で、結局六、七月の熱風と、秋のセントコーン、トゥモロコシをうまく貯えることを怠るべし、餌料は大丈夫と云う事になりました。

かくて冬を囲えましたが、先輩諸兄、農場その他多くの人々のお蔭で今年も無事に置せたことを喜ばせ、感謝致します。

# マネージヤールとなつて

田中

紹介

怪しくと云われ、来た今年の雪と降りだし馬場にも大分積って各馬水と飲の打替えを終えた。水馬六頭の内北澤号(シラカワ)だけ順合に言ない。映画のロケーションに使われるので他の馬より先に廻遊所へ行っているからである。

今年の我が部の戦績をふりかえつてみると、更に目覚ましくこれと先輩同様の田本諸氏の研支援助あって実力を発揮し得たのであつて、我々は深く感謝するのだから、高坂野塚等とは異つて大望(殊に北大は地域的に不利益)の種動部はとて時に我が部においてはその性から支出額が大きく財政は苦しい。しかしながら大きな試合があるたびに奇跡をおねがいし、助成するのにはまことに心苦しい。助成は一ヶ回三〇〇。内、年内一ヶ回三〇〇。衰弱、飼育、備品、親睦、試合加盟費等の一移会計は可成り助成でまかなうことになつてゐる。これは毎年赤字であり、試合関係の費用を主とする。特別会計は北大本部

会・北大乗馬同好会よりの支援金、それに我が部主催の催し物の収益及び馬匹の貸与による謝礼金等でもかなうのであるが、この特別会計で僅かながらも赤字となつて我が部の財政は保たれている。

来年からは暫らく北大で行われる試合は少なく遠征試合が多くなり女子の部の充実とそれに伴う試合を増やして行くことが予想され支出額は増大し財政は苦しくなることと懸われる。私観ではあるが各地域の学校が一室に集り試合する事によって技術面又は問題としてある財政面でも参考になり且つ接触により社会が広くなり更に馬術と云ふものが一般に普及され馬産改良にも役立つて居らう。然しこの様な考え方を持っていては決して、矢鱈に勝ちたい者、微かなる感嘆の興議を極めんとする者、時々驕るの者、或の者等の集りである部員全部が試合する事を本心に心から望んでいるだろうか。としかく、「試合には部の正常な経済能力を越えようとして居るのでは無いだろうか。

この夏の映画ロケーションの件は映画会社の依頼によるものであるが会計帳簿として部員の懐としてみてもホッとした感があった(古いままの愛馬を雪原に駆けさせなければならぬ又試合、乗乗が出来なくなるのにも拘らぬ)。そして今日は日頃何かと御世話になる私等の女性の乗馬会銀髯クラスとマイアツルしてダンスパ

ーティを催した本利益は無かった。又十月の映画会では約一万八千円ほどの収益があったものの赤字という感じのする収益を得るには仲々の苦勞が要る。

新部員の増加に伴い部室拡張と迫っている問題であり要馬と老いてきた。前のマネージャー生田さんから起し無能の私に替って四ヶ月何の積極的打聞策と浮は無い。しかし二二に替しい事は北大馬術部後援会創立の機運である。戦前に又戦後の復興期に我々の及ぶとつかないであろう苦勞をされた先輩諸氏、又馬志な方の御尽力で後援会創立の機運が高まっていることは当初に關係するに一回わけでも現部員にとって実に幸な事であり一日も早くこの成立を期待している。卒業した部の財政とこれは究実した部の根柢をなすものだからである。既に規約草案と出来ておりますが○日の方々一室に会して御意向をきいてありませぬので二二に掲げることを御座します。

x  
x  
x  
x  
x  
x  
x  
x



# 第29回 全日本學生馬術選手権

## 参加の記

鎌田正人

主として一人ではあつた。主が部長諸氏に取頭下見送られ

ひねり学生凡のやうが送手権に出場するのは、いさゝかおこがましいと冠いながら今年こそは、東園、管内の先輩に続いて送手権をかついで来ようとする意気だけは充分であつた。パレスで数日の練習の後競技にのぞんだが結果は芳われ、くやし涙が落ちるだけ別紙の通りであつた。

寂かつたのは優勝候補の一角に選ばれた前日の新聞予想だけと云う有様。しかし、こゝで又厚顔しく、関東送手権の技術の程度とか秘達の技術との比較等をし

て参考に与します。関東送手の十名程は誰かにも上手である。深い騎姿を確りして居り、真直な姿勢は応用性に乏しいが一目見れば、これは型下はすつた美しさが見れるし、夢を卒業し

ている。但しこれ等はパレス又は主馬寮の馬に乗つた時だけのことであつて、パレスの馬が日本では最も合理的に調教された良馬ではない事を残念ながら知らないのである。但し馬場場術の試合数が多いから、かん所をよくとらえ得点能力は吾々よりはるかに優つて居る。しかし本當の意味のうま味は無い。

半ばはならぬ事は至極の推進、拳の静、不動、位置、競技の方へ引き寄せである。本質は何もないし又現在、我々の三、四年の優秀な人達は決してあるものではない。増々奮起を望む所である。

戦后、東京以外の人々が優勝したのは名古屋工大の小島氏を除いて全く東京勢ばかりである。これは若人との関東送手権がパレスクラスの会場か、学習院等は主馬寮の馬で練習している。その結果地方の送手は全くの貧乏馬であり関東勢は自馬と言つても過言ではない。兎角、毎日乗る敵ではないにしてもどの性質を熟知している。自馬と貧乏馬の差は障碍では或る程度以上の技術を併せ、主馬では現在の程度の高さ、用でなければさして技術の差は無い。しかし微妙な人馬の陣は必要とする馬場馬術ではその差は著明に現れて来る。その上、一頭の馬を一回回し乗るために準備運動とさせぬとあつては更下その差は明瞭に現れるであらう。今後は試合前教員より抽せんを行つて一応充分に手技への性質をわきまをきくべきであらう。

でなければ、我々は教員優れた技術を拜んで居らぬは優勝はおろか入賞さえも出来ぬ。とっしよその結果現在の技術程度では一足差がつくことと考えられるか？

しかレニの款を不合理な方法による競技に勝つことを狙うよりは明年から全日本学生自馬隊手帳を行われる予定であるのでその方に全力を挙げるのが我々の進むべき道と考ふる。

皆さんに期待されながら修めな結果に終ったのは頗る重女試合運びに欠けた事等とあり、大変申し訳ないと思つて居ります。

御声援を心から感謝すると共に、明年は皆枚一足即精進の程をお願ひし、抜力して日本一の馬術初に言て上げようではありませんか。

(十二月二十一日迄)

x x x x x x x x x x

# 北大馬術部講 習会の想い出

高階 姦子

まあたらしい角唄連水不菜内さうな顔でクラーケ像の前に乗っていた。

入学宣誓式を終えて、中央講堂から流れ出されて木更と、さびない帽子の学生が靴を括ち出して×カホーンで女にごとか叫んでいた。新入初段の象乗らしかった。

クラーケ像の横に「馬術部入部検回」の立札が黙って立っていた。北大入学を決心する前から自然と馬にあてがれをもっていた私には、この立札を望むのがすこしはとてと出来なかつた。

馬に乗る女んこそおもしろいぞろろなあと想うのが隣の山で、自分が実際に乗れる女んて到達までえられなかつたのだ。

式の翌々日の十八日が締切日であることを知りながら、勇気が出さずきりくまで迷っていたが、ついに馬に

対するあのがれの気持を却えることは出来ず、その日  
と夕方に成って比大のオ一農場まで一人でドキ／＼し  
ながら歩いて行った。ちようど二、三人の学生が馬の  
手入れをしていると二、三で、無事に講習会受講の手續  
きを済ませた。

翌朝、五時に起きて、朝の冷たい空気を胸いっぱい  
吸ってオ一農場まで走っていた。構内の樹木はまだ  
裸なのに、女にか私の心を暖かくつゝ、人ごくれる秋の  
気がした。

馬の前にしてと、乗りたいたと云う希望と、乗れな  
ないという不安が重なりあつて緊張していた。

先輩の勇ましいかけ声の命令、親切な指導に感嘆し  
一生懸命に従った。すぐには乗れるものではなかつた  
つていた馬に突然乗せられたとき女人と驚いたこと  
は、次の週向、女人と乗心地のよかつたことよ、先  
輩の指導に従つてと、この馬に乗り馬を動かすこと  
が出来た。機械でないもの、操縦は一盬りならぬ業だ  
といふことをよく／＼悟つた。

徒歩の号令がか、三時などは、動き出す馬の背下  
つて、とこが痛がるうがむちやくちやく動かせられ  
て乗っているのが精いっぱい。ましてや徒歩の始まる  
うとするととき女は、死ぬ思いの緊張を覚え、駆け出  
した途端、恐ろしいのあまりすべり落ちてしまったと

のだ。

馬の手入の時には、スラシのかけ方、ひづめの芝刈方、  
左づなの持ち方、算教えられるのは楽しかつたが、馬に  
けられるのだけがこわくていつとびく／＼していた。

朝、一時間半の練習は無条件に面白かつた。水早起き  
するせいかわ授業中ねむくて仕方がなかつた。入学して初  
めて聴く講義に皆夢中になつていたうがどうが、その中  
に一人馬の夢をみながら昏眠りをしていた学生もあつた  
のだ。

おる昼休み、農学部のコートンでお弁当を食へたがらお  
友産に、馬はすぐく面白いのだと昏眠りを見解するため  
に話した。左藤さんは乗り気になつて早速部屋へ親を出  
した。こうして今年の女子新入部員は二人となり、いつ  
と仲良く、皆林の仲間に入れていたゞいてゐる。

講習会の一週間はまた、く間に済んでしまつた。  
早速、総会が開かれ、罰算としてその席についた時の  
氏名は又一袋と大きかつた。

(昭和三十三年九月記す)

x  
x  
x  
x  
x

# 春期部内競技会によせて

河原紀夫

小惑日よりの美しい木並木、種々の木々を背景としたる馬場で障礙飛越、パン食い競技、テーパー巻乗りと初めて行う競技の種々には大へん興味もあり、面白くも思つた。僕は馬に乗リながら、初め北海道に疲れた事を考へてみた。僕が北海道に来たのは三年前高校一年目の冬で北海道の一番美しい時節だった。北海道に來る前は、雪が降り、馬ソリが走り、スキー、スケートが出来て、梅雨なく、和らな並木のすがすがしさ、エルクの威風堂々とした容姿、アカシアの純白の街路樹の並び、まったこれだけの大へんロマンチックな感じ考へての事であった。匿路船のデッキから見た津輕の荒浪、トーカーのようニクルく廻る羊蹄山、又後に走るリンゴ園、スドウ園の羅列に驚き、絶壁に打寄せる枝の番さに目を見張った。そして二十四時間の長い旅を終えてやっと札幌に着いた時、その近代建築物の中に数多くのロマンチックなものを含んでゐることに気がついた。初めて見た札幌、「すばらしいし、

と本當に感嘆したのである。僕はその時まで、いやその数ヶ月前はまだその美しさに打たれ、馬術をやることなど一つと頭になかつたが、冬期に入りあの石炭馬車を見て、そして純白の雪の上を走る馬ソリを見て又大學生の乗馬を学校の窓から見て初めて北海道に馬がいかに多く居るかを知り、又乗馬する事のあのすがすがしさが、むしろ羨しが、悪性に馬に乗ることさえささってくれた。好都合な事には、父が札幌の馬術部長をしてゐることから自然に競馬場にもようになり、又、競馬にはいつも父のおとこをして見に行つた。僕が競馬を見たのは小學生の時、定の競馬場に行つたのが最初だが、新潟の時はよく競馬を見に行つたものだ。僕は今でもどうだが、むしろケイオ運歩の方が好きで、又父の馬券をよく當つたからだ。僕が乗馬を初めて暖は競馬場の柵の中に小さな田舎馬場があり、そこで色々教へてもらつた。その頃以下大のキヤルデンが大久保さんだつたと思つた。大久保さんが、インシアンなどといつて聲を上げ手はなして障翳傘で更に傘しさを加えて下さつた事などは大へんよい思い出である。その傘しきもさることながら朝のすがすがしい空気の途中で青々とした空と藍くに見える和らな並木を背景にして馬場を一周するのはなにといふ城気分であつた。又、午後の陽炎の燃える日々汗がっしよりになつて乗りまわした後の気分もそれにおとらなかつた。

裏に大匠を行われ、北海道馬術選手会に二妻進行き老若男女学生サラリーマンから色々の人が在のしきうに行っているこの競技会に大へん食指をうさかしたのだ。老人が馬から落ちたといつてよるこび、学生が障子を飛べなかつたといつて笑つていたのだ。又自身自身夢平競技やピンツリに参加して多少なりとも競技会の気分を味わつたことがすつかりやみつきとなつてしまひ、春期部内競技会には、種々の空想をめぐらしていた。そして教員前から心おわくくする思いであつた。今迄の全朝他人のお鷹立てでその人々と競技のたのしさを味わつていたことが自分等自身で用意して行う競技に教員との乗しさの加算されるのを見出した。部内競技会のカンバンを立て日本晴れの青空の下で部員がスタートの合図をして、審判をし、ゴールの合図をし、矢張さんをして障子を並べ、またその上をぞれを行つた人々が雁が一っくの飛躍が大変楽しいものである事を知つた。又拒否されれば秋刈りとした。味方のテーパーが切れそうなのを見てはらはらし、敵方のテーパーの切れるのをみて大喜びをした。東面対峙では盛んに応援し、バンクイ競技をみては大笑いをし、幹つけ競技を覚えて心を躍らせた。あの時の僕は実に幸運で出場するものどれも勝利の喜びを味わつた。特に東軍北海道の勝利にさしたのばかりか、いだった。その他印象

に残つたのは大場君が二妻と怒馬して敢闘賞をもらつた事、又先輩がわけもなさそうに又々と飛越する事であつた。この日は僕は馬の上で色々の事を思い出した。北海道に来た事、どの美しい事、馬に乗つた事、それらといち故郷とてらし合わせてなんといふことなしに楽しさがこみあげ笑みの止まらぬのおぼえた。この時ほど大場の馬術部に入部した事をうれしく思つた事はなかつた。そして多くの部員の人々と楽しさをわかち合へたことに、大の感謝をしたのである。又四月には新入部員がこの楽しさをおぼえてくれるよう願つて、会う人会う人にその話をするのが常である。ここに書いても僕は馬の話が出ぬは気がすまぬような気がしてくるのである。来年新入部員を迎えて僕等と二年目部員として、一丸集い競技会にすることを願うのである。

# 入部感想 — 落馬記 —

佐藤典子

五、五月の頃、高安時代の友人に出会うと、「馬術部に入ったんだって？」とまるで信じられないといいた。仲間つきで尋ねられることが多くあった。どれ程無縁の存在にみえたものらしい。私自身、勤められて講習会に出るまでは、「荷車をひいて歩く」あの馬にしか馬の存在を意識していなかった。

入部してオードを感じたのは家族的な暖かさや団結の濃さだった。入学式以来、大学とは二人な冷たい、まじまりの女いとしさかと思いはじめた私にとって、それは大きな喜びであった。今では馬のいい女は北大女と、考えられない位である。

台階は無しだった。日頃寝坊の私と、この時ばかりは四時半頃に起き、家から都立までをデクシーで駆け。すがくしい朝の空気を存分に吸い、その日への期待が胸に溢れていたから、それはちっとも苦になら

なかった。

青空と赤ら並木を背景にした練習、照りつける日差しの中での壁列等が、なつかしく思い出される。腫い目を二ナリながら聞いたメイ講義の才は、夜念ながらとうろろと忘れてしまった。たゞ、あの時の部屋が状況と熱い女先輩の表情とが、妙にはっきりと浮かびあがってくる。最近ようやく、各人乗りの楽しさやわかりかけて来た。はじめは拍車とないし、何といつても未熟女なので、丁寧な自動車のエンコのように馬場の真中で立止ってしまい、いくら習った通りか扶助を使ったりもりでも、動かないことがあった。部内運動では味わえない、自由な良さがあるので、休暇を利用して出来るだけ乗りたいと思っている。特に駈足を衰れるまでやってみよう。

私にとって丘越のときは十一月四日の怒馬である。前月の末までの定期試験と、一日からの塵着練習で身体が調子が悪くなくなっていたらしい。その朝二、三套目の障子をかきかき、あといっとうとときにコーナード押えられず、どのま、真直に走ってしまっ。右へ向けようとした姿勢のまま、三、四米、盛石剣が返っていた。普段なら持ち直せばかち知れないが、力が入らなくマラ〜と首につかまってしまった。ふらふら止るだろ〜と経験からわたりたのだから、地帯にはそれがあてはまらないらしい。身体を前からつかれたような感じが

して、はずみで手をばなしてしまつた。……気がつくと、頭といさゝか打つたらしくホーンとしている。上体を起しかけたか力が入らない。誰か、来て立止せてくれた。門祭さんがあごのあしりを見て、「病院へ連れていって方がいい」といふ。痛くは何ともないの。村山さんと長谷川さんに北大の第一外科に連れていかれる。少し分待たせられたが、その間に看護婦さんが傷を洗つて下さつた。洗ひながら、しきりに「痛いでしよう。可哀想に」といわれる。水本人ははその時でも痛いという感覚はあまりなかつたから、キョトンとしていた。ヤツと先生がいらして、泥をとるためにメスを使いながら「僕は同情しないよ。仕事をしないで切つたらなら同僚するけれど、遂ぐでいじむんだったら同情できない女」といわれた。だが、ちよつとでも痛そうに顔をするほど、痛いつとぎいて注射して下さる。……「よく痛める人だね」と苦笑される程だつた。傷口を縫うときだけ目隠しをされたが、それは何故かわからない。

この怪我のため、楽しみにしていた、福島の関東北女子学生運動大会にいけなかつた。しかし乗ろうとすると、……には、無望してでも乗りかちな私にとつて、……は、いかに訓練になつた。又、服袴の点で、……の箱村山さんか……を履いて下さつたからよいやうなと

のの、そうではなかつたら……きつと、もつと頭が悪くなつていたであらう。

傷跡は生涯消えないかといふ女は、とうあまり気にならなくなつた。来年の夏休みにそ思つて存分乗りこい、と今から志えては符ちどうしい気持ちでい、……である。

# 新得遠足の頃

高橋陽



〜29〜

……は、き水を張りつめた新得に下馬、駅には初めて会う先輩部員さんか出迎へにまていた。

牧場に入ってからは、日と薄いと云ふ限の着こなし、帽子のかぶり方などは、……から見て、牧場マンと云う感じを与える。

我々一行の為に特に探ってくれたと云われる牛乳のうまさよ、女にしろ、産地直結だから当然と云えるかもしない。

クラスで朝食を付ませ、いよいよ、牧場見学である。

皆馬に興味を持ってゐると知つてかどうか知らないが馬から見ることにした。

案内は工技師と面談さんが当つた。

二、では主に重種を畜生してゐる。どの馬をみても皆ギンクスサイズ級である。

肉付きよい、骨格よい、まぶすよい、重種だつて却の馬の二倍はありそうぞうだ。そのようなスツカイ馬に一回は二手に分れて騎乗した。暇まわりは「朝満しよ」とあるが、クンシヨンのような感じがする。騎乗の際色々注意されたので、幾分緊張してはいたが、實際乗つてみると左程でもなかつた。何故か歩いてゐるとノタリノタリとソフアアが動いてゐるみたいだから。

重種を終えて奴は俗称「ドサンコロ」を習得した。これはどっから牧場内で乗馬用として使われている。

この馬にも皆乗つたわけであるが、重量級の初騎を乗せて歩くのをみると何だか可笑想を感とした。まだ年端も行かない子供に、戯れに背負つてとらつてゐるみたいだ。それに下は足が地面と、幾らと離れてゐない。それでも皆に重いものを乗せ、側対歩でコト／＼駆けまわると可愛らしさが印象的だ。

午後は義のまわりが一かゝり以上と与りさうな種牛、真空ホンスで搾乳中の乳牛やヨチ／＼歩きの仔牛など

それから牛舎やその他の施設を色々と案内してもらつた。

牧場で丸一日を過ごした経験は今までなかつたので、楽しくもあり、マロマンティックな所でもあると思つた。

と云ふが工技師の言葉を拜借すれば「牧場とは輪で廻つてゐる産業をだしてロマンティックな所ではない。辛い仕事、苦しい日々が殆んどで世間の人々が憧れるような日は雲は散り、雨はコウ／＼と吹き渡る嵐の日には、人のちよつと現われる陽の光に等しいのだと云ふのである。訂で各シーソンの合宿や作業で牧場の仕事の真似事なさいなことは一箇りやうて来たのでその仕事の辛いことは充分知つていた自分ではあつたが、工技師の牧場の日々について話を聞いたときは自分の経験の浅さと、牧場に關する認識不足を痛切に感ぜよにはいられたなかつた。

朝とやに、まわつてゐる牧場にトラックに揺られながら別れを告げた。

一番列車で初めて踏むべき地へ行くのだ。この地では、春、秋、いずれかのシーズンに畜大との定期戦が催される。それで遠足の足を伸して畜大を訪問した。例年ならば参加選手だけが往き来するのだが、今回は部員も殆んどが参加戦の形で併入りをした。

専用バスで田園を巡る郊外を小一時間程走り廻つた。



畜大に着くと早速打合せをし、試合に入った。

午前中はシニア戦、午後はジュニア戦があり次いで初めて催される新人戦があった。これには一年生初戦が出場した。

大小混せて八伯の障碍を飛越するのであるが、他校の馬場での障碍飛越はおろか騎乗すらはじめて、その上一月近いスラングがある、それに乗る馬の気度は全然分らない。キント透馬せむに昇って来るのが精一杯だろうと思いつながら走められた馬に乗った。

その馬は「北漂し」に尻尻が伏せていたのでちよつと気が進まなかつた。「漂し」には度々放り出されているからそんな尻に鬼つたのだろう。ひと畜大の〇日か、おとなしくて誘導さえ上手にやれば飛ぶ馬だと聞かされて少しは安心して来た。慣れる意味で走路を往復していき自分の出場が近づくにつれて心臓は高鳴り、動悸が激しくなるのを感じてはかどうすることと出来ないうつか馬場で練習していた頃「障碍を飛んでいると興奮すると話しているのを聞いたことがあつたが、その時はどんなことかわからなかつた。然し今日、この瞬間に味わうことが出来たのだ。興奮から来る火照りが疾走によって全身に受ける何処に調和して恐らく馬に乗った人しか味わうことので出来ないうちに吸い込ま

れる。そしてせうしている時間はすこく長く感ずるので、非常に長い時間飛ぶ飛けたような気持ちになつてゴールへ帰つて来る。

定は一分ほど流たないのだが。

結果は一落下に陥つた。飛ぶ終えると安心感が一途にやつて来て又何とも云えない気持ちになる。

初中練習している人がこんなことを聞いたら笑い出すかも知れない。然し自分の危険としては練習をして飛ぶことが普遍になつても初心を忘れたくないと思ふ。

興奮の内に試合と終り畜大の学生と教談し次回に馬会を断して各段りを催し、別れた。夜汽車は一行を、終夜寝へり行く。

一日記より

# 入部八ヶ月の感想

原 邦 男

僕が馬術部に入部した動機は一先輩の話で、一般人には深遠いと思われている飛馬が良い環境のお蔭で自由に楽しめることを知ったためと、将来畜産関係の仕事をやりたいからと、多く家畜に接したいと、全く月並な理由からで、堅く考えておりました。

ところが、始めて北海道へ来た最初で怒着いたところが伝説ある(?)速達寮馬術部の室であつたことは嫌でと馬と共にする生活を決定されてしまつたようです。即生活八ヶ月余りを過ごした今、内部の事情と大体理解出来たので簡単な感想を述べてみます。

馬術部の目標が人のプレーより馬自身にある点は、一般運動部と大へん違つたところだと思ひ、此処で各人が自己のプレーを考へてくことの努力が主では部が

成立しないことがわかりました。

この頃の事情がわかつて、なほ当番その他の作業が嫌になることがあります。上級生の積極的な活動に励まされ、少しでも馬のためになることならやる様に努力してあります。これには部の民主的な雰囲気も非常に役に立っている様に思ひます。何事とも上級生からやってくれるとの貴い伝統は我々の時代にも是非維持せねばならぬと決心しています。

最近是我々一年目がコンパその他で親睦をはかり、色々話し合うようになったが、度々話題になるのが現在の花々しい部活動で、果して我々の手で受けついで行けるかと云う不安です。これを解決するには同輩の結束と共に学生間の断片をとり、少くせぬはならぬといふ考えがおります。これは騎乗技術だけに限ることではありません。上級生の持つ物は全部受け継いでその上に自分の創作を加えてこそ部が発展する——これは理想かも知れませんがそれだけの覚悟と努力を持つて了る良いい位になるのではありますまいか。少くとも毎年の新入生代謝があつても一定のレベルを保つ程きに学年差がムラになる事は絶対に必要であり、我々は出来るかぎり上級生に接し多く学ぶ様に努力しますから先輩諸兄どうぞよろしく御願ひします。

## 編集後記

本年夏の多くの遠征試合、当初主催試合と全この日程を終り、来春の雪融けを待つ季節となりました。暖炉のそばで熱いコーヒーを飲み、パイプでニコニコしながらゆつくりと編集したならば、お寄せ下さった原稿に相応しい立派なモノとなつたでしょうが、ロケーションで大きく時間を喰ひ、寒さに覆え、爽いさしの煙草でくちびるを壊さな水らの編集女のだと申し訳をして発行の遅れた事をお詫びします。

本年度の輝しい戦績と共に生々馬術界に大きな地位を占めて行く我が馬術部と、昭和三十三年で創立三十年と返ります。北大馬会時代、銀鉄騎道班時代、戦後の一時中断、復活、自馬養成、と先輩の方々に多くの思い出がありました。正史は創ら

れるもの。十年一昔と云うならば、我が馬術部は三昔の正史を創り持つております。この偉大な行蹟をしのび三十五年には「北大馬術部三十年史」を発行する予定です。この時に先輩方に原稿等で熱いをおかけしようと思ひ、今回の部報には敢て原稿をお預いしませんでした。この三十年史を価値あるものに何卒先輩方の御助力をお願ひ致します。部報発行に当り創更の方々の協力を感謝します。

尚「馬術部会計報告」は森本、佐伯両君より別々に原稿をいただきましたが、編集の都合上両君におことわりして、当方で書き直した事をお詫びします。

(門奈 記)

# 馬術部員名表

学年	氏名	学部	現任	所属	昇格	先	昇格下位取
四	樋口正明	法工・元化	市内北一西三	北学寮	東京都世田谷区上馬町三ノ一三	若采	若采
	伊藤克	獣医	北一三東一	林才	新潟県新津市東普座	新津	新津
	栗原康	工・盆山	南二〇西二	松尾才	小樽市砂谷三	小樽	小樽
	乾直道	理・生物	北一八西六	宮脇才	静岡県庵原町伊佐布	清水	清水
	柴田久男	工・電気	北一四西三	北学寮	空知郡三笠町菅枝清住五四号	蕨松	蕨松
	松田翠	医・薬	北一四西一四		同上		
三	鎌田正人	獣医	零似町東八軒	福島才	蒲川郡蒲河町茗西隈利	日高隈利	日高隈利
	生田勝一	圣斉	北一六西八	楡影寮	旭川市宮下通二四丁目	旭川	旭川
	千葉幹夫	獣医	北一八西七	桜蔭寮	岩手県胆沢郡前沢町白山	前沢	前沢
	村山哲哲	圣斉	市外豊平町美園一区		同上		
	今田哲	獣・養化	市内北一五西五	北大センター	兵庫県西宮市甲東園三ノ八五	大西	大西
	富山三良	医	北一八西四	北御才	十勝国池田町高島	西尾鶴	西尾鶴
	士井敦	農・畜産	北七西五	魚尾才	京都市舞鶴市宇野崎六の五		
	中村美幸	圣斉	南二一西二		同上		
	山本智	水産増産	函館市		市内南八西三		
	山本智	水産増産	北五西九	青年寄宿舎	東京都豊島区奥戸本町一三八四		
	森本祥次	農・林産	北二〇西五	石川才	奈良県橿原市山之坊		
二	佐伯雄二	農・畜				豊原	豊原

一	二	一	二	一	三	一	二	一								
門奈	長谷川	田中	片山	東津	高橋	大場	河原	菅原	瀬田	長谷川	栗田	吉田	佐藤	高橋	本橋	湯浅
駿夫	邦夫	介	静子	健太郎	陽	明	夫	雄	或	雄	男	亨	典子	喜子	幹久	正之
医進一六	法	農・林産	文・英文	水産畜産	医進一六	文	理七	文・心理	理五	理・化	理六	聖八	医進一五	農畜	聖一三	聖一三
市内北一七西八	北一八西五	北一七西八	北二西三	函館市大黒町一三三	北一二西一	北一七西二	北七西一四	北一八西四	北九西一九	北六西一一	北一七西八	同右	北七西一三	北一四西二	北五西九	北一二西四
恵迪寮	恵迪寮	恵迪寮	米沢才	野々瀬才				星野才	恵迪寮			小林才	青年寄道舎	田中才		
神奈川泉機變賣所追込町三一九	同上	静岡県清水市宮代町文	同上	南一西一七	室蘭市母恋南町二二	同上	同上	同上	大坂市東区吉区 平野三歩街三	長野県西筑摩郡倉島町中島	神戸市長田区寿王寺町三ノ八	東京都中野区鷺の宮一・二〇・一	同上	鎌倉市一三所三三	鳥取市上町二〇・一	高崎市新保田中町五三〇
追込	清水	母志	大坂	神戶	鳥取	高崎										